

京都大学	博士（文学）	氏名	中辻 柚珠
論文題目	プラハ芸術界の「ナショナリズムとの距離」1896 - 1919年 —マーネス造形芸術家協会を中心に—		
（論文内容の要旨） 本論文は、マーネス造形芸術家協会（Spolek výtvarných umělců Mánes；以下「マーネス協会」）というプラハを拠点としたモダニスト芸術家団体に焦点を当て、19世紀末から第一次世界大戦直後にかけて、特定の集団がナショナリズムに対して取った立場の通時的変化、およびその変化を規定する要因を考察するものである。 分析を進めるにあたり、「ナショナル・インディファレンス（ネイション・ナショナリズムへの無関心）」の議論を批判的に応用している。近年のナショナリズム研究は、ベネディクト・アンダーソンやアーネスト・ゲルナーらに代表される近代論系の構築主義に対し、厳しい批判を寄せるようになってきている。近代論系の構築主義は、ネイションの起源を前近代に求め、その本質を揺るぎないものとする原初論系の本質主義を批判した点で評価できるが、一方で、ネイションの構築の完了を暗黙裡に前提化し、ネイションをめぐる線引きの試みが永遠に未完の運動であることを等閑視してきた。 この認識のもとで登場してきたのが、ネイションやナショナリズムに対する「無関心」をめぐる諸議論である。これらの議論は、ネイション理念が近代社会に占めたとされる中心性を相対化し、ネイション形成の展開が従来想定されたような単線的発展ではなかったことを実証してきている。 しかし他方で、ナショナル・インディファレンスには概念的課題が生じている。この議論を最初に体系的に論じたタラ・ザーラが、「無関心」をナショナリストの目に映る「想像の非共同体」と定義したのに対し、近年の研究は、ナショナリズムに対する当事者の曖昧さや日和見的態度に焦点を当てるようになってきているためである。前者の視点は、想像上の「無関心」を消そうとする過程でナショナリストの手口が急進化することを主たる問題の対象としており、ナショナリズムそれ自体がどう展開したかという実態に迫る上で意味がある。他方後者は、ナショナリズムに距離を取る人間の主体性や、ナショナリズムへの距離を成立せしめる外的要因を解き明かす上で意味がある。 筆者は、ナショナリズムがどのような状況下で生じ、急進化するのかを分析するためには、この双方の視点の活用が重要であると考え。その上で、「無関心」と表現されてきた当事者の態度がしばしば字義通りの意味では「無関心」でなかったことや、そもそも「無関心」が本来ナショナリストによる侮蔑表現であったことに鑑み			

て、実際の当事者の態度を「ネイション・ナショナリズムとの距離」という別の表現で形容することを提唱する。「距離」という遠近のスペクトラムを導入することで、単にナショナリズムから遠いだけでなく、ナショナリズムに接近していく様までを包括的に考察対象にすることができる。

以上の整理を前提に、本論文では、プラハのモダニスト芸術家たちが自分たちの芸術上の目的とネイションの規範の間でいかにしてナショナリズムに両義的な態度を示すに至ったか、そしてナショナリストが芸術家のそのような距離を、いかにして「無関心」として非難し、ナショナリズムを急進化させていったかを分析している。加えて、第一次世界大戦の経験とその後のネイション観の変化を見ることで、戦後のネイションの正当性を支える言説が、いかに戦前に目的論的に遡及できないものであるかを示す。

第1章では、マーネス協会がどういった政治的・社会的・文化的文脈から生じてきたのかを整理しつつ、最初期のマーネス協会の特徴を述べる。比較的自由的な結社活動が可能となった1860年代以降、チェコでは様々な市民団体がチェコ系とドイツ系に分かれて結成されていった。並行して、政治の場面でもネイションを単位に種々の政党が発展していった。1880年代にはカレル大学が言語別に分かれて2つの大学に再編されるなど、社会では言語を基軸としたネイションの区別が制度化されるようになっていった。こうした文脈の中で登場したマーネス協会は、ネイションを代表する画家として知られるヨゼフ・マーネスにちなむ名称であることから分かるように、愛郷的と呼びうる性格を有していた。他方、19世紀末のヨーロッパでは、既存のアカデミズムを乗り越えようとするモダニズムの動きが新たな芸術の価値を生み出しつつあった。創刊直後の機関誌『自由な潮流』には、モダニズムへの直接的な言及はないが、国内の芸術の後進性に対する自覚が示されている。こうした「後進性」をヨーロッパの「普遍的」水準に押し上げたいという気持ちが、マーネス協会の初期の活動を支えていた。

第2章では、19世紀末の衛生化措置に伴うプラハの景観の再編問題をきっかけに生じた論争に焦点を当てる。創刊当初から本問題に関心を寄せていた『自由な潮流』は、新たにプラハに建てられた建築物群には「自分らしい特質」が欠けているとして、国内の建築家たちの仕事を批判した。この記事を受け、当時マーネス協会の非会員であった建築家たちが反論の文章を寄せた。ここでの論争を通じ、マーネス協会は、独創的であればそこにチェコ性が宿るだろうという、既に文学界で知られていた「チェコ・モダニズム」宣言に類する見解を提示した。この見解は、チェコ性の枠組み自体を重視しつつも、その内実をあらかじめ決定することを否定するものである。ここでの議論の論者らが自らをチェコ人と自認しているのは史料から明らかであるが、ナショナリズムの諸問題は、自らを共同体の一員と想像した段階で完結するものではない。

ナショナリティのステレオタイプ化に対する抵抗を見る上でも、ネイション形成を単線的発展プロセスと想定する従来の見方は再検討されなくてはならない。

第3章では、1901年始動のチェコ王立近代ギャラリーの設立計画に関する『自由な潮流』の議論を扱う。ギャラリー自体はまごうことなき文化施設であるが、それをどのように運営していくかは政治的問題でもあった。マーネス協会は本ギャラリーの運営問題に関して「（純粹に）芸術的な観点」と「ナショナルな／民族的な観点」という2つの評価軸を提示し、後者の観点自体は否定しないものの、前者を優先すべきだと主張した。その上で、キュレーションを「民族」別の二部門制に分けることに反対した。最終的にギャラリーはチェコ系・ドイツ系の二部門制となるが、この際マーネス協会がチェコ系・ドイツ系の分化を超越した制度の樹立を模索していた点は重要である。

政治家・芸術家双方の思惑が交錯したのはギャラリーだけではなかった。第4章では、プラハ造形芸術アカデミーの教授の任命問題をめぐって生じた約10年に及ぶ論争を扱っている。協会の芸術至上主義的立場は、当初、「民族」や「種族」といった出自を基準に教員を選定することへの批判に結びつき、教員のチェコ語運用力についても、採用時点では問わない立場を示していた。しかし、アカデミーが掲げていた二言語併用主義の方針に反して、ドイツ系芸術家だけがチェコ語修得を免除されていた実態が露呈していったこと、また、「ドイツ人」芸術家を「ドイツ人」ゆえにアカデミーの新たな教員に任用するという噂がプラハで広まったことで、マーネス協会はアカデミーのチェコ語化を求める急進的主張を掲げるに至る。しかし、その際の議論において、協会は「民族的な嘆き」が生じた要因をアカデミーの芸術的観点の軽視に求めた。つまり、ナショナリスティックに見える主張は、協会にとって本意ではなかった。マーネス協会内のアカデミーに対する立場の展開は、マーネス協会のナショナリズム的態度ではなく、ナショナリズムに翻弄される様子こそを浮かび上がらせるものであったと言える。

第5章では、『自由な潮流』における「ナショナルな芸術」をめぐる諸議論を概観し、少なくとも協会にナショナリティを積極的に定義する態度は見られず、そのことが自由な活動を提供する下地となったのだと論じる。個人による個々の論考からは、ナショナリズムの排他的側面への自覚から、ネイションとエスニシティを意図的に切り分ける言説が次第に定着していった過程を見出す。マーネス協会のこうした態度は、周囲のナショナリスト勢力から見逃されるものではなく、具体的には青年チェコ党系の『ナーロドニー・リスティ』や造形芸術家連盟によってナショナル・インディファレンスと見なされるものであったと論じる。さらに、チェコ内での支持が集め難い状況でいかにして協会が活動を維持していたのかを考えるために、帝国行政からの支援について考察する。文化教育省からの補助金はチェコ内の諸機関から提供されて

いた他の補助金とは比較にならないほど高額で、マーネス協会の活動の維持に不可欠なものであり、概して協会に君主国の解体を望む要因はなかったと指摘する。

第II部では大戦勃発後の歴史を扱う。第6章では、マーネス協会がそれまで対立していた他の芸術家団体と共同で「造形芸術家支援委員会」という団体を立ち上げ、「チェコ民族」の芸術家やその家族の戦時下の困窮問題に取り組んでいった過程に焦点を当てた。芸術家たちがそれまでの対立を脇に置いて共助活動に乗り出した背景には、戦前からマーネス協会に対するプラハ市民の支持が限定的であったことと、チェコのあらゆる市民団体がチェコ系・ドイツ系に分かれて組織されていたことから、マーネス協会の求心力や制度上の観点から、共助の際には「チェコ民族」単位で集まる以外の選択肢が無かったと分析する。戦時下において、帝国行政からマーネス協会への補助金支給は停止され、造形芸術家支援委員会への支援も限定的であったことも明らかにしている。対照的に、ウィーンの芸術家団体は引き続き国家から補助金を得ており、造形芸術家のための福祉団体についても、ウィーンのは多額の寄付を得ていた。このような地理的に非対称な支援状況の中で、君主国とマーネス協会の間の互惠関係は崩壊していったと分析している。

第7章では、マーネス協会が新国家の体制に相応しい文化団体として自らを再編していく過程を分析する。戦後、新たに名誉会員となった画家のフランチšek・クプカは、戦時中にパリにいてチェコスロヴァキアの独立運動に深くコミットした経歴を有していた。他方、ボフミル・クビシュタという画家は、戦時中に君主国側で軍功をあげており、そのことを誇る手紙を知人に送ってもいた。クビシュタが1918年11月にスペイン風邪で亡くなった際、クビシュタの友人が協会に彼の回顧展を開催するよう依頼した。しかし、協会は上記の手紙の件を引き合いに出しながら、この依頼を退けた。また、戦死にせよ病死にせよ、会員が亡くなった際には機関誌で訃報が掲載されるのが常であったが、クビシュタについては例外的にそれが行われなかった。片や独立運動に深くコミットし、片や君主国側での軍功を誇った会員らへのマーネス協会の対照的な対応は、戦後のマーネス協会の方針転換を物語る。

第8章では、フランタ・アニーシュというマーネス協会に深くコミットした芸術家の一人に焦点を当て、彼の戦時中の振舞いが戦後にネイションへの「無関心」として日刊紙で糾弾され、それが原因でマーネス協会を追放されることとなる過程を分析する。戦前のアニーシュは、芸術産業における実業家としてプラハで名を馳せており、その活動はナショナルな境界線に隔たれることなく展開されていた。しかし、戦後になると、農業党の日刊紙『ヴェチェル』がアニーシュを「戦前はチェコ系の芸術諸サークルでのみ活動した人物」と位置づけながら、戦時中のアニーシュの軍事的「裏切り行為」を非難した。その「裏切り行為」とは、チェコスロヴァキア軍団に所属することを選んだ元ハプスブルク軍兵士をウィーンの当局に名指して報告したことを指

す。『ヴェチュル』は、アニーシュが「チェコ人」であるにもかかわらずこのように振舞ったことを非難するが、ネイションか君主国かという二項対立は戦時中に顕在化した問題であり、アニーシュは戦前には宮廷の仕事を引き受けてもいた。上記の報道を受け、協会の名誉にかかわると考えたマーネス協会は、最終的にアニーシュの行動を「罪」と判断し、彼を協会から追放した。かくしてマーネス協会は、少なくとも表面上、ネイションの大義に忠実な団体となった。ネイションの一体性は、ネイションの理念に不都合な存在を無関心と非難して不可視化することによっても強化されうるものである点に注意が必要である。

第9章では、大戦と戦後の体制転換を経験したマーネス協会のネイション観が戦前と比べてどのように変化していったかを考察する。第5章で言及されるとおり、大戦前夜の『自由な潮流』は、概してネイションやエスニシティに対して決定的態度を取ってはならず、同時に、「ナショナルな問題」を「人種」や「エスニックな」問題から切り離す主張が個々人によって展開される場でもあった。しかし、戦後新たに生じた国家は、チェコ王冠に基づく歴史的権利だけでなく、ハンガリー王冠の下にあったスロヴァキア系住民を同じネイションと見なすエスニックな自然権を根拠としていた。こうした状況下で、マーネス協会の言説は戦前と比べてエスニックなものへと接近していった。戦後最初の『自由な潮流』では、君主国からの解放史観が打ち出されるとともに、スラヴの連帯への志向が明白に表明されていた。新たに機関誌の編集となったジャーカヴェツは、スラヴの連帯を説くとともに、「種族的」観点を擁護する立場を表明した。

以上のように、19世紀末から第一次世界大戦が勃発するまでのマーネス協会は、ときにナショナリズムの言説に翻弄されつつも、概して芸術的目標のためにナショナリズムと一定の距離を取ろうと努めていた。しかし、戦時中の逼迫した経済状況は、戦前にナショナルな観点をめぐって対立していた他団体との「民族」的共助に協会を向かわせ、この経験は、戦後の新国家体制の支持に結びついていった。彼らの共助の経験は、君主国からの財政支援の乏しさと表裏一体でもあった。君主国への信頼を失ったマーネス協会は、名誉会員や新しい編集委員の選定、そして一部の芸術家に対する沈黙を通じて、新国家に相応しい協会へと自らを再編していった。

しかし重要なのは、戦後のマーネス協会のネイションに対する支持のありようは、大戦の産物であって、戦前に遡れるものではないという点である。このことは、単線的なネイション形成の展開を自明視してきた旧来のナショナリズム研究に修正を迫るものである。ネイションやナショナリズムに対する距離感の変化を考慮に入れ、そうした距離を「無関心」と見なす非難のありようを考察していくことで、近代におけるネイションの中心性を相対化するだけでなく、ナショナリズム運動の展開の実態をより正確に把握することが可能となる。

(論文審査の結果の要旨)

互いに見も知らぬ人々の間に同じ国民としての同胞意識を育み、共助的な結束を強める作用のあるナショナリズムは、一方で内なる他者を排撃し、外なる他者との対立をしばしば助長する。フランス革命以降のヨーロッパ史では今日まで繰り返されるモチーフであるし、世界各地での植民地支配からの回避や解放を目指す運動も、ポストコロニアルな状況下の諸問題も、多くはナショナリズムと不可分であった。それゆえ、この近現代世界の宿業のごとき現象は歴史学を含む人文社会科学の諸分野で長らく強い関心をひく対象であり、多岐にわたる膨大な研究を蓄積してきた。本論文は、そのなかでも最先端と言えるテーマ「ナショナル・インディファレンス〔国民、ナショナリズムに対する無関心〕」から出発し、汎用性の高い新しい独創的な理論的視角を定立するだけでなく、その視角を、ひじょうに興味深いチェコ史におけるケーススタディに応用してみせた貴重な研究である。

一国を成すべき、特定の均質性または共通性を帯びる集団、すなわち国民ないしネイションは、遠い過去に起源を持ちどこかのタイミングで「覚醒」するのか、近代以降に新たに「誕生」するのか。あるいはリアルな実体はなく、あくまで社会的ないし言説的な一過性の出来事または想像上の構築物なのか。過去半世紀ほどの間に展開したこれらの議論は、いずれの重要性も今なお減じてはいないが、「国民」が何らかの形で成立することを所与の前提にしていた。2000年代以降、この前提に対してなされたいくつかの異議申し立ての一つが、ナショナル・インディファレンスである。ナショナリストたちが、国民であるべきなのになろうとしない「無関心な」住民を不断に糾弾していたことに注目するこの観点は、19世紀後半から20世紀前半のチェコをはじめとする東中欧をフィールドにする歴史学的研究によって実証性を担保されてきた。ここからさらに一步を進めた課題が、ナショナリストたちによって無関心だと非難されてきた当の人々の、国民やナショナリズムに対する実際の思いや態度である。本論文でも踏まえられている最新の先行研究が、ようやく本格的な検討を始めているが、それでも、記録を残しにくい人々のさまざまな動機やふるまいを、曖昧でしかも否定的な含意の「無関心」というラベルで括ることは適切ではない。

筆者は上記の史学史上の展開を、日本語、英語、チェコ語の多くの研究成果に即して丹念に辿り直し整理した上で、国民やナショナリズムに対する人々の揺れ動く思いと変化する態度を捉えるための視角として、「ナショナリズムとの距離」という著者オリジナルの鋭利なコンセプトを提示した。

本論文が「ナショナリズムとの距離」を切り口にして検討したのは、チェコのモダニズムを牽引した1896年創立のマーネス造形芸術家協会の、ハプスブルク君主国下での第一次世界大戦を経て、チェコスロヴァキア建国に至る時期における、ネイション、ナショナリズムとの対峙の仕方の変遷である。ナショナリズムと相いれない芸術至上主義的立場を奉じたとされる画家や彫刻家、建築家などの造形芸術家への着眼はすぐれた選択である。「はじめに」と「結論」をはさみ、全9章で構成される本論

文は、協会の機関誌『自由な潮流』や内部文書類を主たる史料として、ここに集った芸術家たちの制作活動にはあえて目を向けず、その言論や社会的・政治的行為を精密に分析してゆく。ここにも筆者の独創性がうかがえる。

前半の第一部では、大戦前までのマーネス協会が、普遍主義的なモダニズムのスタンスと「チェコ性」なるものへの要請との間で葛藤し、「チェコ性」を、ナショナリストの奉じるような枠組みを何も前提にしない、あくまで未来に開かれたものとして定位した上で目標にしたことを明らかにした。さらに、ドイツ系およびチェコ系によるナショナリズム的立場からの批判に対するやむを得ない対応として、協会が便宜的に消極的なナショナリズムを一時的に表明した事例を詳細に分析することによって、柔軟に「ナショナリズムとの距離」をとるありようを活写した。これらの諸章は、『自由な潮流』所収の論考を精緻に読解した成果として高く評価できる。

後半の第二部では、多民族帝国であるハプスブルク君主国の中で「ナショナリズムとの距離」をそれなりにとれていたマーネス協会が、第一次世界大戦により経済的苦境に陥ったときに政府からの十分な支援を受けられず、ナショナリズムに親和的な他のチェコ系芸術諸団体と協力して共助組織の運営を余儀なくされる経験を通じて、協会が「ナショナリズムとの距離」を取り続ける理由を喪失してゆく過程を力強く論証する。こうして新生チェコスロヴァキア国家の建国期には、協会はかつての重要会員を国民ないし祖国の裏切り者として切り捨て、いわばゼロ距離で新国家に伴走するのである。このダイナミックで人の顔の見える精彩な叙述は、協会内部の手稿史料も駆使してなされており、筆者の歴史家としての力量をよく示す。

本論文は、今後のナショナリズム史研究にとってきわめて有用な「ナショナリズムとの距離」という視角を学界に提供しただけでなく、これを用いてユニークな歴史的対象たる芸術家集団に取り組み、ナショナリズム史研究の一大焦点ともいえる前世紀転換期のチェコ史に新知見をもたらした。その学術的意義は十分に認められる。もちろん、今後の発展に期するべき点もないわけではない。たとえば、マーネス協会と構成員たちの活動内容と個性のさらなる探究、作品の写真を多数組み込んで編集されていた『自由な潮流』のメディア史的な分析、トランスナショナルなモダニズム潮流における協会の位置の検討、君主国・チェコスロヴァキア国家と協会・芸術家の中間にあったプラハ市政の調査。とはいえ、いずれも筆者本人が課題としてよく理解していることであり、今後の研究の中に適切に組み込まれるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2026年1月23日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。